SUSTAINABLE WEEK

SUSTAINABLE WEEK SUPPORTS SDGs

The SDGs Pioneer Booklet Vol.1

もくじ

P1 もくじ

P2 ブックレット作成にあたって

立命館学園内の SDGs への取り組み

P3	- SDGs 1	フェアトレード団体 beleaf	（衣笠）
P4	- SDGs 2	Table For Two APU 支部	（APU）
P5	- SDGs 3	アクティブ・フォー・オール拠点	（BKC）
P6	- SDGs 4	立命館守山中学校・高等学校	（附属校）
P7	- SDGs 5	リサーチライフサポート室	（各キャンパス）
P8	- SDGs 6	株式会社ウイルステージ	（校友）
P9	- SDGs 7	立命館宇治中学校・高等学校	（附属校）
P10	- SDGs 8	Loop.A.S APU 校友会学生実行委員会	（APU）
P11	- SDGs 9	立命館小学校	（附属校）
P12	- SDGs 10	立命館中学校・高等学校	（附属校）
P13	- SDGs 11	EDGE +R	（BKC・OIC）
P14	- SDGs 12	DesignFactory	（BKC）
P15	- SDGs 13	サステイナビリティ学研究センター	（各キャンパス）
P16	- SDGs 14	Dive in Blue	（インカレ）
P17	- SDGs 15	SOFIX 農業推進機構	（BKC）
P18	- SDGs 16	平和ミュージアム	（衣笠）
P19	- SDGs 17	立命館大学 Sustainable Week 実行委員会	（BKC）

P20 編集後記

ブックレット作成にあたって

Sustainable Development Goals とは

国連は、2015 年 9 月に開催された「国連持続可能な開発サミット」において、人間、地球および繁栄のための行動計画として、17 の目標と 169 のターゲットからなる、誰 1 人取り残さない「持続可能な開発目標（SDGs）」を掲げました。これは、2000 年から 2015 年まで世界の開発の指針となっていた「ミレニアム開発目標（MDGs）」の成果を土台としています。MDGs の目標が 8 つで 21 ターゲットであったことや、対象が発展途上国であったことに比べ、SDGs のカバーする範囲は先進国も巻き込んだ世界中に広がっており、全世界で取り組んでいかないと達成できない状況になっています。その流れにのり、大学の世界ランキングの評価項目に SDGs が 2019 年から追加されたりと、教育機関でも SDGs を推進していく動きがみられます。

▲国連が制定した SDGs のロゴデザイン

近年、日本でも SDGs への取り組みは急激に加速化してきています。2020 年に行われる「東京オリンピック・パラリンピック」や、2025 年に開催される「大阪・関西万博」では、SDGs に積極的に取り組んでいくことを宣言しています。達成期限である 2030 年を目指して、世界が一致団結して取り組んでいく基盤が日本でも出来上がりつつあります。

学生から見た立命館学園における SDGs

近年、世界的に SDGs 達成に向けた取り組みが行われており、日本国内でも SDGs に沿った事業が増えてきています。そのような時代の流れの中、2017 年「Sustainable Week」を初開催しました。これは、学生主体で行う初の SDGs 体験型イベントとのことで話題となっていました。そのような活動を行っていく中で、様々な人々が関わってこそ SDGs は達成されるということが、理論だけでなく実践としてわかってきました。

しかしながら、立命館大学内での SDGs の認知度や活動については開催以前と比べても、それほど大きな変化はありませんでした。このような事象は他大学でもよく見られ、SDGs に熱心に取り組む人と他の人で意識に差があるという課題があります。そこで SDGs を知る・伝える・実践するという段階を踏んだ企画を実施し、一般の方が感じている意識の差をできる限り埋める取り組みを行ってきました。その成果もあってか、2018 年度は企業･行政･市民高校生・大学生など、SDGs に関わる方を徐々に増やし、浸透させることができたと感じています。

当ブックレットは、そのような SDGs に関する取り組みや社会への貢献を、立命館学園としてどのように取り組んでいるかをまとめたものです。作成に当たりまして立命館大学新聞社のご指導の元、大学生の SDGs の最先端をこの 1 年間走ってきた学生らが取材・執筆・編集までを行いました。当ブックレットの発刊により、立命館学園でさらに SDGs に関する取り組みが増えていく、活性化していくことを期待しております。

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会
立命館大学 生命科学部 3 回生
切田澄礼

大学内外を問わない活動によって フェアトレードを普及させる

とりの笛を実際に販売している様子

タイとつながる とりの笛プロジェクト

団体創設者のタイへのインターンがきっかけで「とりの笛プロジェクト」が始動した。とりの笛とは、現地 NGO ミラー財団が扱う山岳民族の手工芸品の一つだ。これは北タイに住む山岳民族の村の人に職業を与える取り組みとして実施している「e-Bannok プロジェクト」から生まれた商品の 1 つである。このプロジェクトではこの鳥の笛の委託販売のほかに、現地生産者のところへ直接訪問し、山岳民族の方への支援を実施している。

フェアトレード商品の販売を考える

当団体の支援活動としては、以前はとりの笛のネックレスを作成していました。しかし、現在では商品の作成・製造ではなく、特に商品自体の取引や販売に注力しています。また、プロジェクトの新たな提案として置物やピアスが挙がっています。しかし、山岳民族の若者が街へ行く傾向があるために、後継者不足問題が発生するなどの新たな課題も見えてきました。

直接私たちが販売する他にも委託販売を行っており、日本 (主に関西) で開かれる様々なイベントで、とりの笛が販売されています。また、多方面に向けて販売を行うために通信販売での展開も行っています。現地生産者の訪問はスタディツアーを年 2 回実施し、生産者との交流や、とりの笛の作成見学や体験、現地の暮らしの体験を学んでいただく機会提供を実施しています。

団体担当者の声

今後の活動として直近では、大阪ワンワールドフェスティバルへの参加が決まっています。また、今と同じ支援先での活動に焦点を当て続ける他にも、今まで積み重ねたノウハウを元にしてアフリカや南アジアなどに拡大することも検討しています。販売場所については今までは関西中心に開催されるイベントの参加が多かったですが、通信販売で多くの方にとりの笛を手にとっていただけるように力を入れていきます。フェアトレードの普及をするに当たり、「買い物でできる国際協力」ということを伝え、今後ともこれを活動の基軸にしていきます。

担当者：谷浦 早紀 氏

フェアトレード団体 beleaf

- KIC サークル
- 京都府北市
- https://beleaf.jimdo.com/

beleaf ではタイのアカ族、ラフ族など山岳民族の方々が持つ課題に対して彼ら自身の手で解決できるような環境を届けるため、活動しているタイ現地 NGO ミラー財団と協力し、とりの笛の委託販売や、スタディーツアーでの現地訪問などを行い、学内でフェアトレード団体として活動しています。

所属学生たち

国際貢献をきっかけにして食生活改善に関心をもってもらう

提案メニュー試作を行うキッチンミーティングの様子

ヘルシー・ムスリムなど多様なニーズに答える提案

立命館アジア太平洋大学の学生による団体、Table For Two（以下 TFT）APU 支部は学内のカフェテリアへのメニュー提案と導入を 2011 年から実施している。そこでは専門学校の調理科出身の学生による監修を受け、通常の商品開発だけでなく、APU に所属するムスリム学生に向けた商品開発などを行っている。このような活動やサルベージ・パーティの開催、大分県の別府市民の方々とイベントの開催を実施している。

国際貢献から、食に関心を

2010 年秋に設立された TFT APU 支部は「食べるだけで国際貢献」という NPO 法人 Table For Two 本来の目的とは別に「国際貢献をきっかけに食生活の改善に関心をもってもらおう」という信念のもと活動しています。そして、2011 年夏に団体内で考案したメニューのカフェテリアへの提案を開始しました。提案する3つのメニューのうち最低 1 つは、ムスリム学生のためにもハラル料理になるように考えています。また、外部向けの活動として、持て余している食材を参加者が持参し調理するサルベージ・パーティや TFT 本部が主催するアフリカやアジアの子ども達に給食支援事業である、おにぎりアクションに参加しながら、フードロスに関する食料問題の現状を伝えています。このような活動を経て、消費者が問題解決の為に身近な所からできる活動を紹介しています。

団体担当者の声

当団体は APU 支部との事もあって、一昨年までは主に学内での活動にとどまっていました。しかし、昨年から学内の活動で今までより多くの学生を巻き込むイベントを行うことができました。その上、別府市民の方々と共にイベントを開催するなど、活動の幅を広げてきています。今後はもっと多くの人の世界の食問題についての関心を高めていくため、APU 生や別府市民の方々が食を通じて交流することができるイベントを作り、そのイベントに参加した方の今後の行動を変えていけるように活動を続け、世界の食問題について関心を高めて行きたいです。

担当者：坂本 美月 氏

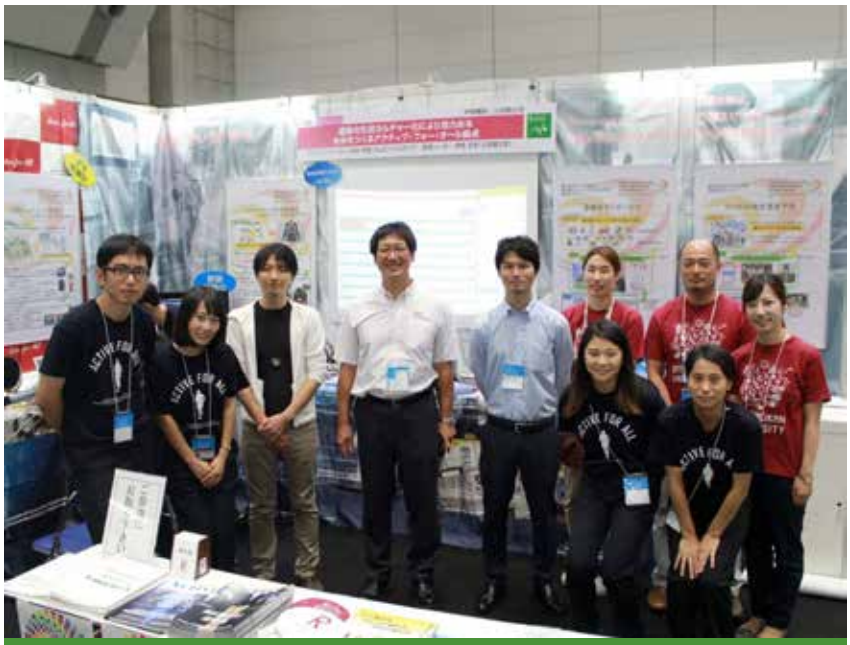
Table For Two APU 支部

- 立命館アジア太平洋大学サークル
- 大分県別府市

Table For Two APU 支部は 2010 年の秋に APU 所属学生によって立ち上げられました。そこでは、世界の飢餓と肥満の解決を目指す NPO 団体 TABLE FOR TWO の活動を APU 内で実施しています。

所属学生たち

誰もが無意識的に運動し、健康でいられる未来を大学から創り出す



発表に臨む立命館大学・順天堂大学 共同研究チーム

大学の研究と社会を連動させる中心に

センター・オブ・イノベーション (COI) は、文部科学省と国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) が進める研究成果を事業化することで、目指すべき未来を実現する長期大型プロジェクトだ。立命館大学は順天堂大学とともに、「運動の生活カルチャー化」を合言葉に、運動を通じて多様な人たちと交流できる社会を作り、健康寿命の延伸を目指すアクティブ・フォー・オール拠点の活動に取り組んでいる。

実現に向けた 4 プロジェクト

COI では以下の 4 つの活動を主に行っています。

①運動時のバイタルデータの見える化を可能にするスマートウェアを開発し、大量生産体制を確立しました。また、測定した生体信号を音に変換するアラートシステムの構築を行っています。

②限られた空間に音を届かせる指向性スピーカーを草津市の産学官民交流施設に常設し、市民の方がいつでも空間シェアリングを体験することを可能にしています。

③運動誘導・継続システムを活用し地域での実証を行い、運動インストラクターの派遣システムの検証や、地域コミュニティ形成促進に関する試みを行っています。

④ロコモティブシンドローム予防のサプリ・アプリを開発し、運動プログラムや健康見守りサービスも地域で実装実験を始めています。

事業担当者の声

当事業は 2019 年からプロジェクトの 3 期目 (フェーズ 3) を迎え、いよいよ社会実装 (事業化・サービス化) を本格化させていきます。「運動の生活カルチャー化」を目指すと同時に、ポスト COI として自立する組織体をつくることも目指しています。実際のニーズを探し、それに応えるものを開発するだけでなく、得られた知見をビジネス・学問にフィードバックしていきたいと考えています。各研究技術について、SDGs の 17 の目標の下で、学生の皆さんとも一緒に進めたいです。その際は 169 のターゲットも意識して、今後もプロジェクトの推進に尽力します。

担当者：山田 涼馬 氏

アクティブ・フォー・オール拠点

- BKC リサーチオフィス
- 滋賀県草津市
- http://www.activeforall.jp/

COI のアクティブ・フォー・オール拠点は「運動」を媒介に「スポーツ・運動」と「医療」の両側面から健康を維持・増進し、全ての人々をアクティブな状態へ誘導し、人々の時間と空間を共有し、「日本の誇るべき絆社会」を実現します。

建物外観

APUの国際学生と共に、混ざり、学び、新たな視点を共有する

国際学生と共にグループディスカッションを実施する様子

APU × SDGs Innovation Challenge

APU の国際学生を招き、各学生の出身国、地域が持つ SDGs に関連する課題について、高校生による英語でプレゼンテーション、APU 生とのディスカッションを通じ、自分たちのアクションプランを提案する。生徒が事前に準備していた視点は、ディスカッションを通して更新され、APU 生と共に解決策を模索することになった。生徒たちが自ら選んだテーマは、都市交通、就職、兵役と教育など、多岐にわたった。

当事者として世界を共創するため

当企画は、SDGs 達成のために私たちがすべきこと、すなわち課題解決のために多様な他者と協働することを実践するものです。ディスカッションでは、自分自身の物の見方、考え方を伝えることや、逆にそれらを括弧に入れて、異なる見方、考え方を受け容れることが求められます。また、他者と世界を共創する活動では、各自のリーダーシップが問われます。

一連の活動を振り返り、生徒自身がどのようなリーダーシップを発揮すればチームにより良く貢献できるかを考えます。意見を伝えるのが得意な生徒がいれば、意見をまとめるのが得意な生徒、引き出すことが得意な生徒もいます。自分らしいリーダーシップを見つめ直し、また次の機会に自分なりの目標を持って臨むことを目指します。

企画担当者の声

立命館守山高等学校では、ユネスコスクールとして学校を挙げて SDGs に取り組んでいます。生徒たちは、これまでも様々な教科や科目、課外活動で SDGs について学んできました。初めのうちは教員主導で、生徒たちが貢献したいゴールを考える活動、各単元がどのゴールにつながるかを考える活動などを実施しました。今では日常の学びのなかで「何のために学んでいるか」を自ら問える生徒が育っています。また、生徒自身が実際に地域や世界に貢献するために「国際協力」という授業や、校長主催の「ドリカムチャレンジプランコンテスト」といった様々なアクションを起こしてきました。

担当者：由谷 晋一 教諭

立命館守山中学校・高等学校

- 学校法人立命館 附属校
- 滋賀県守山市
- http://www.ritsumei.ac.jp/mrc/

立命館守山高校は、2006 年に設立された最も新しい附属高校です。SSH 指定校、ユネスコスクールとして、生徒一人ひとりが「グローバルサイエンスリーダー」となるための教育を進めています。

学校外観

女性研究者の活躍、推進を目指す。

男女共同参画への取組を紹介する出版物

女性研究者の活躍、推進に向けた手立てを

立命館大学研究部リサーチオフィス男女共同参画推進リサーチライフサポート室は、女性研究者の研究環境をサポートし、女子学生・院生の活躍を励ますことを目的としている。この目的実現に向けた身近なロールモデルとして、女性教員がいきいきと輝くことが大切と考えている。現在、女性教員の比率をさらに高めるため、採用計画などの数値目標だけでなく、教育・研究などライフイベントを両立しやすい環境整備と推進を目指している。

女性・若手が活躍できる立命館に

女性の活躍の取り組みとして、人事選考に関わる「無意識のバイアス」についての話のほか、女性研究者に関する「多様性から創造性とイノベーションを創出する大学づくり ～女性研究者が活躍できる研究環境の実現～」やアンコンシャスバイアスに関する「女性研究者支援とダイバーシティ研究環境実現に向けて」といったシンポジウムを開催しています。また、学内保育園の設置やライフイベント中も研究を継続できるように支援する研究者支援制度を設け、研究者が教育・研究と家庭生活を両立できるよう尽力しています。

他にも、「女性研究者発表月間」「ライスボールセミナー」といった若手研究者の研究成果の発表の場に女性研究者発表月間も設け、女子学生・女子大学院生の学習意欲向上、研究へのモチベーション向上にも尽力しています。

事業担当者の声

少しずつではありますが、日本は男女共同参画への実現へと向かっています。その過程で、女性の研究者の活躍、推進は今以上に求められていくことになります。しかしながら、女性は「女性」という固定概念（アンコンシャスバイアス）に囚われてしまい、研究者を目指す女子学生が少ないです。

ですが、研究がおもしろい、もっと突き詰めていきたいと思うのであれば、その気持に正直になることが大切です。学生の皆さんには、自分自身がおもしろいと思ったものを手放すことなく、やり続けていき、リスクを恐れず、挑戦していってほしいと思います。

担当者：田中 弘美 教授

リサーチライフサポート室

- 事務局：BKC リサーチオフィス内
- 授乳室 コアステーション 2F
- http://www.ritsumei.ac.jp/research/rsupport/

リサーチライフサポート室は、男女共同参画推進委員会と協同し、「女性研究者の研究環境整備のための取組」、「女性研究者の研究力向上のための取組およびリーダー育成のための取組」、「女性研究者の上位職への積極的登用に向けた取組」などを担い、活動しています。

同室管理の授乳室

社会の要望に応え、さらに新たな社会問題を解決できるビジネスを創造する

浄化後、阿字池に鏡写しで見える平等院鳳凰堂の様子

街づくりから水質浄化 そして持続的な養殖へ

同社は本学経済学部卒業生の大谷氏が代表取締役を務める企業だ。同社は基幹業務としてさまざまな規模の街づくりをトータルに手がけている。水質浄化システムは、その業務で課題であった街中の水辺の維持管理の難しさを解決するために開発された。当システムは2014年に世界遺産である平等院鳳凰堂の阿字池の浄化に成功し、話題となった。そして、当システムを応用した陸上養殖の普及に向けて活動している。

水質改善が養殖魚の安全に繋がる

同社が開発した水質浄化システムを応用した陸上養殖施設は本学BKCの一室でも現在、実験が行われています。そこでは大学内とのこともあり、使用する水を自然界から常時取り込むことが不可能です。しかし当システムは水の入れ替えなしの完全閉鎖水系での養殖が可能とのことで、現在も順調に養殖生産が可動しています。また、この技術が滋賀県から生まれたことも新たな展開には重要とのことです。滋賀県は全国的にもトップクラスの排水規制があるにもかかわらず、当技術はそれをクリアしています。さらに、水質浄化された状態で養殖された魚は、水産養殖管理協議会(ASC)の認証を取得しやすいとのことです。これらの点で既存の水環境を汚染することなく、安全な食糧生産に寄与できます。今後も、浄化システムの応用展開が社会課題解決となると期待されています。

活動する校友の声

実際に立命館大学を卒業し事業を行う中で感じた、学生に考えておいてほしいことは、自分が持っている技術・考え・知識などを短い目で見ず、長い目線で育てていくことです。会社であってもなんであっても、基幹となるものがない限り、新たな発見やビジネスなどは生まれません。そのため、社会に出る前に、学生のみなさんのコアとなるものを一つでも見つけることをおすすめします。そして、そのコアを中心に様々な応用した活動などを勉強・体験・実践し、次の世代にもつながる、持続可能なより良い世の中を創る人材になっていただきたいです。

校友：大谷 洋士 氏

株式会社ウイルステージ

- 本学校友による事業
- 滋賀県草津市
- http://www.willstage.com/

本学BKCに近い、草津市青山に本社を構える街づくりをトータルで手がける企業です。2010年より水質浄化システムを活用した事業を開始し、水質浄化のみならず、陸上養殖やアクアポニックスなどの食品事業への展開も行っています。

本社外観

エネルギーの視点から、現代社会の様々な課題を解決できるヒトを育てる

一つのテーマに沿って、グループでプレゼン発表する様子

持続可能なエネルギー政策とは

グローバルな人間育成をめざした教育活動の一環として高校１年生の現代社会の授業で実施されたこの企画。様々な社会問題に対して生徒自らが解決策を考え、意見を発信できる授業を行っている。今回取り上げた活動では、政府の「第５次エネルギー基本計画」の原案が、本当に地球温暖化を防止し、被害を受けている人々や動植物を救うことができるのかを、個人・グループごとに考え、意見書としてまとめた。

中高を通じた新たな学び・活動

当企画は中高一貫生 (高校１年８組～ 10 組) の現代社会の授業で取り組まれています。現代社会という科目は、指導範囲が広く教えるだけでも多くの時間が必要です。そこで同学では中学３年生である程度の範囲の学習を終え、高校１年生では日本や世界における現在の課題の解決手段について主体的に考え、２年計画で授業を実施しています。そして、SDGs で取り上げられている様々な課題の中から、現代社会のカリキュラムにそって１つの課題をピックアップしています。そこでは「知る」「考える」「発表する」３段階構成で２ヶ月間授業が進行しています。今回取材した環境のテーマでは、温暖化の現状やパリ協定の目標、再生可能エネルギーについて学習し、個人で考え、グループで討論・集約し、班ごとにまとめた意見書を経済産業省へ提出しました。

企画担当者の声

当企画は、高校生に世の中を変えるための興味・関心をもち、課題を主体的に解決したいというマインドを育成していくことが目的です。また、高校生が政策に対して意見を言って、それを担当している大人がそれに対してコメントや意見を貰えるような仕組みが、今ある形よりも簡単にできるようになれば、世界は大きく変わるとも考えています。今回のようなカリキュラムに沿った SDGs の理解は高校２年生、３年生の授業も実施しております。今後は、社会科の授業だけではなく、学校全体で SDGs への取組が活発になっていくことを期待しています。

担当者：河原 紀彦 教諭

立命館宇治中学校・高等学校

- 学校法人立命館 附属校
- 京都府宇治市
- http://www.ritsumei.ac.jp/ujc/

立命館宇治高校は 1994 年に設立された、立命館学園で２番目にできた附属高校です。特徴として国際教育を推進する新しい国際型中高一貫校を掲げ、「答のない問題をどのように考えるか」ができる人材育成を進めています。

学校外観

通常の校友会とは違う、学生と関わる校友会事業を提供していく

Loop.A.S 活動学生らの集合写真

世界に羽ばたく校友と学生をつなぐ架け橋に

APU 校友と学生をつなぐ架け橋として活動する当団体。校友と学生の交流を強めるイベントや企画を運営し、校友と学生をつなげてている。そこでは交流場所を設ける以外にも、校友会主催のイベントに興味を持つ学生を招待するといった活動を行っている。最終的には校友と学生が協働し、その中でなにかプロジェクトを達成する、新たなフィールドで活躍する学生が出ることを目指し、活動を継続中だ。

価値の継承をどのように行うのか

当団体はまだ開学間もない APU を在学生のみならず、卒業生も巻き込んで盛り上げるべく創設されました。そこでは、校友会業務を学生が担うということではなく、学生目線で校友会を巻き込みながら新たな活動を行っています。在学中に校友会を認識し、知ることで学生らが卒業後も校友会としての活動に参加することを目指しています。校友からは学生による新鮮な意見が今後の仕事や活動において参考になるとの声も頂いています。

このような活動を継続的に行うために、数年後のビジョンを再確認し、バックキャスティング的に事象を見ることが必要となってきます。つまり、目の前ではなく未来のビジョンから組織を運営することで APU の学生、そして校友までが繋がる、永続的な組織に一歩でも近づく活動をしていきたいと考えています。

団体担当者の声

当団体は 2019 年を持って、設立 7 年目を迎えます。私達が掲げる一つの目標として校内での Loop.A.S の知名度を 9 割以上にするということがあります。しかしながら、実際の認知度は、恐らく 3 割程度ではないかと踏んでいます。さらなる認知度向上のためにも、今年度は SNS を利用した広報活動や、校友会や卒業生方面への交流を強めていこうと考えています。そして、自分たちの強みでもある、卒業生と在学生が繋がりを持つことに興味を持つ学生が増え、大学でできることがもっと増えていくことを目指して活動を続けてまいります。

担当者：前山 大和 氏

Loop.A.S（校友会学生実行委員会）

- 立命館アジア太平洋大学サークル
- http://www.alumni.apu.ac.jp/ja/aboutus/

Loop.A.S. は校友会の在学生組織で、卒業生（校友）と在学生を繋げる事 (Loop する) により、①在学生が卒業生から刺激を受けてより充実した学生生活を送る事 ②卒業生が在学生から活力を得る事 ③APU ファミリーが発展する事 ④メンバーが成長する事 ⑤校友会が発展することを目的に活動している組織です。

SDGsの理解を深めるため、Minecraftを使ったサステイナブルな都市の想像

Minecraft で建造物を作成している児童の様子

生徒と共に考える 都市と SDGs の授業

「サステイナブル（持続可能）な街づくり」をテーマにした５回（10 時間）にわたる授業を行った。そこでは座学だけではなく、Minecraft（ブロックを単位としたオープンワールドゲーム）を用いて SDGs についての実践学習を実施している。また、SDGs だけでなく、アプリ内のレッドストーン回路というものを用いたアルゴリズムの教育も行った。そして、各班で作成した都市を生徒全員の前で発表する時間を設けている。

きっかけから創造にシフトする

当授業では大まかに２つの内容に分かれています。初回の授業は，駐日スウェーデン大使館の方をゲスト講師としてお招しました。そこでは、様々なイノベーションの発祥地であるスウェーデンの実情に加え，サステイナブルを推進する環境先進国でもあることを学び「未来のサステイナブルな都市を、みんなのアイデアで Minecraft を使って作って欲しい」という依頼を受けました。それ以降の授業では、児童たちが班に分かれ、どのようなサステイナブルな街を作るか計画を立てた後、実際にアプリ上での都市制作を実施しました。また、マルチプレイによるオンラインでの協働も行いました。そこでは１人１人が PC に向かっていたものの「手が空いたらこの内装を作るのを手伝って！」など、活発に声を掛け合いながら街づくりを行っている様子が伺えました。

事業担当者の声

当授業での活動は一般的な授業とは違い、アプリを通じた SDGs への理解を促進して行くことを目的としていました。当授業は子供たちの評価も高く、全体を通じて「みんなでしっかり計画して協力して作れたので，とてもうまくできたし，すごく満足しました」といった声や「みんなで１つの世界を作るのは，とても画期的でした。失敗してもみんなで笑ってはげましあい，楽しくできました」といった声が挙がりました。このような体験型学習を通じた学びが、満足度が高い状態で行えるため、継続的にこのような取り組みを行うことを目指しています。

担当者：六車 陽一 教諭

立命館小学校

- 学校法人立命館 附属校
- 京都府京都市
- http://www.ritsumei.ac.jp/primary/

立命館小学校は立命館学園の附属校の中で唯一の小学校です。「培根達支（ばいこんたつし）」を教育の考え方としており、生き方の根本、学びの基礎・基本をしっかり身に付け、社会のさまざまな分野で活躍する児童の育成に力を入れています。

校舎外観

生徒主体でSDGsにフィーチャーし、自分から新たな価値や社会を考える

RSGF 当日の参加者による集合写真

Rits Super Global Forum RSGF

年に一度、立命館高等学校で実施される5日間のイベントRits Super Global Forum（RSGF）。解のない問題に対して、SDGsを一つの考えるためのフックや繋がりとしながら、多様な価値観を持った海外生と共に英語でディスカッションを行う。さらに、生徒が考案したテーマに関したフィールドワークを実施する。当企画の最終日には、約200名の参加者全員が一同に会し、最終成果の共有・最終討議を行う。

解のない問から価値創造をする

当企画はさまざまな社会課題のための解のない問題のディスカッションを行っています。またそれと同時に、それを多様な価値観を持った海外生と英語を使用して5日間を過ごす経験を提供しています。生徒主体で実施される当イベントはSDGsへの取り組みも非常に活発になっています。当企画のテーマ自体が深い関連を持っていることはもちろんのこと、異なる文化的背景を持つ海外生との協働作業によって、SDGsについて現実の国際社会で起こるプロセスと同様のそれを高校時代に体験できるという特徴もあります。さらに、取り組みの一環として「キャンパスSDGs at NKC」というSDGsの認知度向上企画も実施しています。これをアクションプランとして実践することで、自分たちの身近なことで取り組めるSDGsに関する活動も実施しています。

企画担当者の声

当企画は、生徒主体による学びを確立したいという思いから来る「スチューデント・ファースト」が色濃く出ている企画です。そのため、教職員が計画的に実施する企画と比較すると予定が遅れることもありますが、生徒たち自身にコミットしているという感覚が生まれ、当事者性をもって当企画に臨むことができています。教員はあくまで黒子、フォロワーであり、前に出ることは極力避けるようにしています。今後は、このような生徒主体という形は崩さずに、17の各目標をさらにクローズアップしていくなどして、深化させながら取り組んでいきたいです。

担当者：神野 哲次 教諭

立命館中学校・高等学校

- 学校法人立命館 附属校
- 京都府長岡京市
- http://www.ritsumei.ac.jp/fkc/

立命館高校は1913年12月に設立された、立命館学園の最も歴史のある附属高校です。SSH・SGHを双方の取り組みを通じ、「高い学力形成と主体的な学びを促す授業づくり」「自立し社会に貢献する心の育成」を進めています。

学校外観

新しいものを作り出す共通点を元に持続可能な社会を創るイノベーターを育成

プロジェクトごとに集まり、ビジネスについて考える学生ら

持続可能性と繋がりから生み出すイノベーション

EDGE+R では自ら課題を見出し、解決できる人材の排出のために全学・他大学・社会から多様な人が混ざる場所を提供し、学生がそれぞれの繋がりを持ちながら、社会の様々な場所で活躍・イノベーションの創出を行う人材育成を行っている。そこでは、本学のみならず IDEA コンソーシアムの複数の大学と連携した企画や活動も実施されており、多様な価値観の創出やイノベーターの育成に力を入れている。

社会を変えるという共通点

当プログラムは文部科学省グローバルアントレプレナー育成促進事業（EDGE、2014 年度～2016 年度）に引き続き、文部科学省次世代アントレプレナー育成事業（EDGE-NEXT、2017 年度～2021 年度）に採択されました。そこでは「多様性」と「チーム」をキーワードに、自主自律のチーム活動を通じた、新たな価値創造の「面白さ」と「プロセス」を体験する正課外の実践型学習を提供しています。これによって、ひと一人が育つ環境を創るのではなく、育った人が別の場所で学んだことを実践し、チームのリーダーとしてスキルとマインドを継承していく増殖型イノベーションエコシステムの構築を目指しています。それによって、修了学生が起業家や企業内アントレプレナーとして多様な立場で活躍する社会を実現するべく活動を行っています。

プログラム担当者の声

当プログラムは、他大学が掲げる起業家育成といったことに重点を置くのではなく、いかにして学生それぞれが持つフィールドで学んだことを生かしていくかを重要視しています。そのため、デザイン思考や、最先端のイノベーション手法であるデザイン・ドリブン・イノベーションといった実践的なスキルの育成やマインドを養成するためのプログラムを運営しております。また現場を知ってから考える大切さを知ってもらうことや、当プログラム修了学生の事業化支援など様々な形で、イノベーションに取り組む学生の支援を今後共、継続していきます。

担当者：川面 創 氏

立命館大学 EDGE+R

- 文部科学省 EDGE-NEXT
- 滋賀県草津市 / 大阪府茨木市
- http://www.ritsumei.ac.jp/ru_gr/edge/

EDGE+R(イノベーション･アーキテクト養成プログラム) はイノベーションを起こすことができる人材の輩出を目指し、学内外を問わず、多様なひとが混ざる「場」として、学部の垣根を越えた多様なプログラムを用意しています。

部屋外観

建築を通してできることから加子母の発展を目指す

加子母での実際の建築風景

建築を通じて私たちにできることを考える

Design Factory は、立命館大学理工学部建築都市デザイン学科の学生を中心的なメンバーとしている。学内学外ともに幅広く交流を行いながら、岐阜県にある加子母という地域で実際に建築を行い、その地域の発展を目指すことを主な活動としている。

他にも、他大学と月１回の幹事会、学内で年２回の建築ツアーなどのイベントも加子母に実際に訪れることで、現地の理解をする活動も行っている。

建築を通じて資材の循環を考える

人口 3000 人の山間の小さなまちである岐阜県中津川市加子母村で毎年、その土地で利用されるための様々な建築を行いその発展に貢献することを主な活動としています。今年は墓地の東屋を夏季長期休暇を利用して建てました。Design Factory では木材を多く利用するため、メンバーが陸の豊かさについても意識を持つ必要があると考え、利用する加子母の木材の間伐体験なども行っています。加子母木匠塾という企画においては他大学も参加し、建築物を月１回の幹事会で他大学学生らと意見を交えながら決定します。そして、その幹事会でそれまでに建てたものが継続して利用してもらえるように修復を行うことで、つくる者として、使い切りではないという責任を果たしています。このような活動を通して学内学外の建築学生の広い交流も実現しています。

団体担当者の声

今後 Design Factory の活動を SDGs の目標を達成により繋げるため、これまで行ってきた修復で作る責任を果たしたり、間伐体験から陸の豊かさを守ることを継続しつつ、新たに植林体験を通して陸の豊かさを守る活動も行っていきたいと考えています。SDGs の目標は 2030 年という未来に向けた目標であり、その時代を将来生きる我々若者が率先して取り組む必要がある問題であると考えています。そのため今は大学生でもできることから取り組んでいくべきであると考え、今後も建築を通し加子母の発展に貢献しながら、活動を続けていくつもりです。

担当者：西岡 美里 氏

Design Factory

- BKC サークル
- 滋賀県草津市
- https://twitter.com/designfact0ry

Design Factory は、建築都市デザイン学科の学生で構成されるサークルです。学生同士の交流や専門知識の学習、他大学の建築学科の学生との交流を目的としています。有名建築を巡る建築ツアーや、夏季には加子母木匠塾に参加しています。

幹事会の様子

気候変動への適応や、脱炭素社会の構築を技術と政策を融合した様々な活動で取り組む

地球環境委員会でのパネルディスカッションの様子

サステイナブル価値の創造と定着を目指して

サステイナビリティ学研究センター（RCS）は「サステイナブル価値の創造と定着」を理念とし、地球を取り巻く３つのシステム（地球システム・社会システム・人間システム）の結節点に主眼を置いた研究を推進している。

その研究は「サステイナブルな人間の生活」、「サステイナブルな人間の活動」、「サステイナブルな人間の生存」の３つのコンセプトを持ち、ESD や国際人材育成の実践成果を社会に発信している。

種々のサステイナビリティに関する活動

当センターでは以下の４つの活動を主に行っています。
①「水再生循環によるアジアの水資源開発研究拠点形成」「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理方法の開発」「アジアの持続的発展および循環型社会形成のための環境・エネルギー分野の研究開発と人材育成」などの研究プロジェクトを国際ネットワーク構築と共に推進　②若手を中心にプロジェクト研究の進捗報告を実施する「プログレスレポート会議」を開催／３キャンパスを接続した定期研究会「RCS フォーラム」を開催　③グリーンビルディング・コンソーシアム、水とグリーンビル研究会による産学連携。滋賀県環境保全協会、茨木商工会議所との連携。大連循環産業経済区との協力協定　④立命館地球環境委員会シンポジウム開催、サステイナブル・アイデア・コンテストを実施、エコプロダクツ展への出展などで、外部発信

事業担当者の声

RCS は 2007 年に開設され、エネルギーや環境に関する基礎・応用の研究者が集いながら、立命館大学における文理総合研究のプラットホームになりつつあります。今後これまで以上に技術と政策を融合した研究を推進するとともに、国際的なネットワークを構築し、幅広い分野の教員・研究者の交流と発信の場を目指してまいります。OIC、BKC、衣笠、APU を結びながら、異分野の教員・研究者たちが、日常的な研究や教学での共同をすすめ、将来を託すべき優れた若手研究者・教育者の育成を図ってゆくことで、多様で高度な成果が生まれてゆくことを確信しています。

担当者：近本 智行 教授

サステイナビリティ学研究センター（RCS）

- 立命館大学 研究センター
- 本学各キャンパス
- http://www.ritsumei.ac.jp/research/rcs/

RCS はこれまで明確に定義されてこなかったサステイナビリティ学を「今、地球が直面する緊急課題を解決し、かつ将来世代の可能性を脅かさない現代社会の構築に問いを立て、理論を確立し、実践していくこと」と定義し、センターの研究教育活動を通じて、サステイナビリティ学の構築を図るセンターです。

循環型住宅の提案・実証

自身が活動する海に対する意識を自分たちの活動を通じて考える

クリーンアップでのゴミ回収の様子

毎年実施企画 越前クリーンアップ

当サークルのダイビング拠点となっている福井県越前町の海を掃除する活動。関西県内40の大学で参加者を募り、集まった学生ら（2018年：約50名）で海岸や海の中を3つの地点に分かれて掃除する。夏に行うサークル活動に向け、冬の間放置された海岸に流れ着いた多くのゴミを掃除する。回収するゴミのほとんどがプラスチックやペットボトルなどの浮遊物であり、海岸の景観の美化にも貢献している。

泳ぐ立場だからこそ海をきれいに

私達のサークルでは、活動に必要なライセンス取得トレーニングと2回生以降のファンダイビングを兼ねた夏合宿などのイベントを行っています。そこに向けて、シーズンが始まる前の5月に福井県の越前町のクリーンアップを開催しています。毎年50名以上が関西圏の大学から参加し、3つのポイントに分かれて海岸のゴミ拾いや、海の中のゴミの回収を半日かけて実施。ゴミの多くはペットボトル、発泡スチロールなどで、中にはタイヤなどの大きなゴミもあります。その中には昨今話題のマイクロプラスチックの元となるようなものも多く、それらもできるだけ回収します。このようなゴミが冬の間放置された海岸に多く流れ着くため、当企画は毎年実施しています。近年は中国や韓国から流れてくる薬品等もあり、漂流物について海上保安庁への報告も行っています。

団体担当者の声

当活動は今から20年ほど前に福井県で物資の貨物船が座礁した事がきっかけで始まりました。この座礁によるオイル漏れの影響でダイバーも減ったそうです。そこで越前を拠点にして活動していた当時のサークルメンバーが石を1つずつ洗って海に戻すという活動を取り組み、それから毎年海辺の清掃を行うようになったと聞いています。この活動は、現在世界中で深刻な海洋ゴミ・マイクロプラスチックの生物濃縮などの課題解決のロールモデルになると考えています。微力ながら、本活動が豊かな海を守る事に繋がる事を期待して、今後も毎年クリーンアップを行いたいです。

担当者：志邊 圭乃 氏

Dive In Blue

- インカレサークル
- 関西圏
- https://twitter.com/dib_scubadiving

関西約40大学の学生が参加するインカレダイビングサークルです。ライセンスの取得、全大学の学生が参加する夏合宿、沖縄や海外でダイビングする春合宿など、1年を通して様々な活動を行い、ダイビングや海に関するボランティアなどにも多く参加しています。

所属学生たち

弊大学開発の土壌肥沃度指数 SOFIXを用いた定量的で再現性のある有機農法の実現

SOFIX を実際に導入するにあたった現地視察の様子

技術と知見からわかる地域バイオマスの発掘

現在の日本の農業で使われている化学肥料は海外から輸入されているものが多い。これは化学肥料の使用による問題が取りた出されること以前に、その輸入を行う段階で必要となる石油燃料の消費など、トータルコストが非常に高くなっている。そこで、地域のバイオマスを大学発の技術 SOFIX で利活用し、その地域独自の肥料を発掘することで自治体や企業、農家らとともに新たな農業手法を創り出す活動を行っている。

地産地消を農業生産段階から

地域のバイオマスを発掘し、循環型農業を実現させた地域として、京都の与謝野町が挙げられます。ここでは「京の豆っこ米」というお米が栽培されています。このお米は化学肥料を用いず、有機肥料を使って作られているものであり、その肥料は与謝野町にある有機物供給施設で出る「おから」「魚あら」といった天然素材を用いていることで有名です。今まで使っていた化学肥料を地域で産出した有機資源に変え、農作物の栽培を行うことで、自然に優しい循環型農業を実現しています。与謝野町では有機資源の発掘や肥料にする際の配合具合などについて、当機構とともに活動を実施しています。化学肥料などの外部の資源に頼らず、地域にある資源を用いて農業を行う気風が高まっている中、他地域でのバイオマスの発掘や肥料産出の活動を今後とも支えていきます。

事業担当者の声

当機構は 2015 年に設立されました。そして現在に至るまで約 3,000 件の土壌を診断し、73 人の SOFIX 診断士が誕生してきました。このような活動を続けることで、SOFIX の輪をこれからも広げていきたいと思っています。今後として土壌の診断のみでなく、農業と健康についての啓発活動を実施しようと考えています。体の調子が悪く、医療機関に診療に行った際に処方されるのが「薬」ではなく、「野菜」になるような社会の創造のため、医療と連携した活動を推進する予定です。また、日本のみならずベトナムなどの海外への進出も考えています。

担当者：松田 文雄 氏

SOFIX 農業推進機構

- 学内ベンチャー（一般社団法人）
- 滋賀県草津市
- https://sofixagri.com/

SOFIX 農業推進機構は、立命館大学生命科学部の久保幹教授によって開発された SOFIX の技術を用いて、土の環境に配慮した安定した農業を支援しています。それにより、安心・安全・美味しい農産物を届け、農業の新しい価値を提案していきます。

事業所風景

平和創造のために大学が果たすべき社会的責任を自覚し、その主体者を育てる

国際平和ミュージアム内展示の様子

世界報道写真展
世界の「いま」を克明に伝える

立命館大学国際平和ミュージアムは1992年に世界初で唯一の大学所有の総合的な平和博物館として開館。立命館大学の「平和と民主主義」の教学理念を具体化する教育・研究機関として、また社会に開かれ、発信する社会開放施設として開設された。2005年にリニューアル・オープンし、新たに「平和をもとめて」をテーマに第2展示室を設け、国際平和メディア資料室を新設。現在の収蔵資料は約45000点にのぼる。

写真から見る世界の事実と平和

2018年度は常設展に加えてミニ企画展示および、イベント・企画など多数実施しています。そのなかでも、1995年から毎年特別展として開催され続けているのが「世界報道写真展」です。世界報道写真展はオランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品で構成した世界最大級の写真展で2018年は61回目の開催を数えました。

国際平和ミュージアムは世界報道写真財団、朝日新聞社とともにこの企画を主催しました。本企画は立命館大学では衣笠キャンパスとびわこ・くさつキャンパス、また立命館アジア太平洋大学でも開催しました。地球上で起こっているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真は、人々に現実を強く訴える力を持っていると言えます。

施設担当者の声

まだまだ国際平和ミュージアムの認知が学内でされていないことや、立命館大学所属の学部生と教職員もあまり来ていないのが現状です。そのため、まず来てもらうための工夫をする必要があります。例えば、展示物や教材キットを貸し出していくことや、世界報道写真展に参加してもらうといったきっかけになることを提供することが考えられます。立命館の建学の精神を表す「平和と民主主義」を具現化する施設として、特に学生は在学中には一度訪れてほしいです。国際平和ミュージアムとしてもこの施設を原動力として教育の質の向上へ結びつけていきます。

担当者：田島 募 氏

国際平和ミュージアム

- 立命館大学 施設
- 京都市北区
- http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/

立命館大学国際平和ミュージアムは立命館大学の「平和と民主主義」の教学理念を具体化する教育・研究機関として、また社会に開かれ、発信する社会開放施設として開設されました。3つのテーマでの常設展や特別展などが展示されています。

施設外観

立命館大学、関西、日本の大学での学生によるSDGsの活動をリードしていく

Sustainable Week 2018 パネルディスカッションの様子

SDGs 体験型イベント Sustainable Week

Sustainable Week は立命館大学内外の学生団体や企業・団体が様々な企画を行うイベント。これらの企画は SDGs 17 のゴールを達成するために、自分たちの団体が持つ強みや技術を用いて活動を実施した。2018 年度の活動では高校生から社会人まで様々な方々に共感していただき、より大きな SDGs に関心のあるコミュニティ形成を行った。更なる発展のために、出張授業や SDGs の教育に関する事業提携なども実施。

学生が自分で成長し広げる

当イベントは 2018 年度で 2 回目の開催です。ここではそれぞれ 17 個の SDGs に取組む学生たちが集まることで、普段では出会わない学生らによる様々なチームが生まれてきました。このような、新たな価値や活動が生まれる源流として、当団体は SDGs リーダーの育成を行うとともに、大学を核に周辺地域とともに持続的な社会を作っていく仕組み「増殖型 SDGs エコシステム 」の提唱、及びその実証例となるために活動を行っています。

また、SDGs リーダー育成が学園のシステムの中に組み込むため、現在新たに学生が自身のプロジェクトを発信する授業の提案なども行っています。Sustainbale Week などのイベントから、大学の授業、組織マネジメントなども含めて、リーダーやシステムが一気に増殖することを目指しています。

団体担当者の声

現在、Sustainable Week では創設メンバーの卒業に伴って、活動の見直しや提携する団体の確認などを行う時期にあります。また昨年、当団体がグランプリを取得した大学 SDGs ACTION! AWARDS の 2019 年度大会では APU の学生がグランプリを取得されたとのことで、いよいよ団体・大学単体ではなく、学園として SDGs に取り組むための基盤が整ってきたと考えています。このような学園全体での SDGs に関する現状も踏まえて、これからの立命館の SDGs の中心を担う学生にはさらなる活動を展開していっていただきたいと考えています。

担当者：亀石 弥都 氏

立命館大学 Sustainble Week 実行委員会

- BKC サークル
- 滋賀県草津市
- https://sustainableweek.org/

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会は、学生・市民が SDGs を「自分ごと」に落とし込む手法を考えています。そして、行動に移すきっかけとして、大学のキャンパスと周辺地域を小さな地球と見立てた SDGs への取り組みを推進しています。

所属学生たち

編集後記

この度は本ブックレットを最後までご覧いただき、誠にありがとうございました。全体の編集を担当させていただきました戸簾隼人と申します。実は当ブックレット、実は周りからあまりやるべきではないと言われていた内容の企画であったのですが、職員の方々の「やってみたらいいんじゃない？」の一声で作成に踏み切ることができました。このようなまとめ活動に関しては、既にさまざまなところで実施されており、後追いとなってしまうことから、私達が行うべきことなのか非常に悩ましいものでした。しかしながら、その実践を行う中で私達から見た周辺団体や、本学園内でのSDGsの取り組みを、マッピング・評価するといったアクティビティを行い、団体としての成長につなげるよう誘導していただいたSW創設者の上田氏には感謝しております。

当ブックレットを作りたいという思いは、私自身が所属していた立命館大学新聞社での取り組みが主にあります。そこでは学生が取材を行い、そこで人々が考えていることや感じていること、そして何をしていきたいのかを一つの記事にまとめ上げ、これを人に伝えています。その考え方はSDGsを啓発していこうとする本団体が活動をする上で、自分たちが動きながら伝えるだけでなく、当ブックレットの発信によって新たな人にもつながる手段になると考えています。それを踏まえた上で、本団体メンバーらに取材から執筆までを行っていただきました。

実際に当ブックレットの記事の取材に関しては、本団体学生らが立命館大学新聞社前主幹 吉武氏にレクチャーを受け、行ったものです。しかしながら、SDGsという言葉が一般的にまだまだ普及しているとは言えない現状で、このような取材を行うことはたやすくありませんでした。新しくできた団体からの取材であるということもあり、「SDGsと自分の活動には関わりがない」「全く関係のない学生らに評価されることは心外である」と言った声を伺うことも多々ありました。そのため、今後このような活動を継続していくならば、学園と協働しながら、その活動自体に学生が関与していくしくみづくりが必要不可欠になってくるように感じております。

その一方、このような活動を続けたことで本団体学生らがどのような企業、団体、教育機関がSDGsに本気で活動をしているか、すぐに見分けられるようになりました。その一方で、今までSDGsを取り入れていないにもかかわらず、準ずるような活動をする方々とのコミュニケーションの種を創ることを学生ができるようになったと考えております。つまり、本ブックレットの作成のみが成果として出ているのではなく、その作成途中で行ったことひとつひとつが彼らのスキルとして成果を挙げていることがわかりました。

最後に、当ブックレットを作成するにあたって協力していだきました学生・教職員・校友・理事の皆様に感謝を申し上げます。またお忙しい中、今回の取材・掲載を快諾していただきました団体・企業の方々には感謝してもしきれません。そして何より、実際に現地に取材に赴いたり、忙しい中オンラインで取材をセットしたり、原稿執筆や修正の確認などを細かく行っていただきました立命館大学Sustainable Week実行委員会のメンバーらにも感謝をしております。これからも自分たちがやりたいと思うことや楽しいこと、そしてなにより人が面白いと思えるような企画やイベントを行ってくれることを願い、編集後記とさせていただきます。ありがとうございました。

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会
立命館大学 生命科学部 ３回生
戸簾隼人

The SDGs Pioneer Booklet Vol.1

発行日	2019 年 3 月 11 日
発行者	立命館大学 Sustainable Week 実行委員会
編者・著者	戸簾 隼人　（立命館大学 生命科学部３回生）
著者	切田 澄礼　（立命館大学 生命科学部３回生）
	和田 純矢　（立命館大学 理工学部３回生）
	奥山 拓　（立命館大学 理工学部３回生）
	亀石 弥都　（立命館大学 スポーツ健康科学部２回生）
	岡村 謙一　（立命館大学 生命科学部２回生）
	中西 優奈　（立命館大学 生命科学部２回生）
	安里 唯　（立命館大学 食マネジメント学部１回生）
	岡尾 宗一郎　（立命館大学 理工学部１回生）
	田中 直人　（立命館大学 理工学部１回生）
住所	〒525-8577　滋賀県草津市野路東 1-1-1
Email	sustainableweek@gmail.com
Web	https://sustainableweek.org/
協力	立命館大学新聞社
	https://www.ritsumeikanunivpress.com/

本書に掲載されている企業・団体、活動は 2019 年 3 月時点のものです。

この報告書に関するご意見・ご感想などについてはメールでお問い合わせください。

誰一人取り残さない

No one will be left behind

https://sustainableweek.org/